

オートバイのデザインについて語る。戦時中に日本業誌(現ヤマハ)に書かれた技術力を生かしてオートバイを生産しようと、ヤマハ発動機

書 歴 履 の 私

司 憲 庵 久 栄
おん けん ちく え

®

が昭和三十年(一九五五年)に発足、GKグループが、第一号機のデザインを受注してYAA1が誕生した。

オートバイは、人が今までトボトボ歩いてきたものが、自由自在に走り回れるのだから、こんなすばらしいことはない。イメージ的に書くと、

鹿や馬と自分の間にオートバイがあり、それを重ねていくと、軽快感、敏捷感、生き物感が出てくる。肌合いも雨にぬれた羊毛の色、太陽に光っている鹿の皮膚……。

デザイナーは一種の吟遊詩人なのだ。頭の中に大きくイメージを描き、オートバイのパーツを手分けして、単純で軽快に、鹿のようにというイ

「胸も、心臓も、尻もある」

吟遊詩人のように形生む

メージに基づいてそれぞれがデザインしていく。軍国主義から解放された戦後の日本で、自由に走る馬や鹿は国民の夢を実現するものだった。そのオートバイが優秀だったことは、浅間レースや富士登山レースで次々と優勝したことで、世間に認められた。

だいが後のことだが、昭和四十八年、私はオーストラリアに招待された。シドニー、

港に着いたらさっそくインタビュールームに連れて行かれ、「YAA1やDT1は非常にいいオートバイだ。しかし、あれは欧州のオートバイの変形ではないか」と質問された。日本にはオリジナルがないと言いたいわけだ。

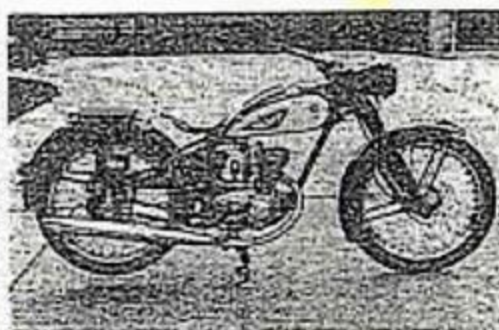
私はとっさに「私たちの国ではオートバイのことをセックスオーガンという。胸もあ

れば、心臓もあり、尻もある。男が乗れば、オートバイは雌になるし、女が乗れば牡になる」という言葉が出てしまった。翌日の新聞には「セックステイナール日本から来る」という見出しが躍っていた。

そんな時、日本大使館から大使公邸に来てくれと連絡があった。国家に恥をかかせたので、思いあぐねた末、排

えてくださり、「どのパーティーに行っても日本は物まねだとやられてましたが、あのよう言ってくれたので誇り高いものがあります」と喜ばれていた。

セックスオーガンと見ると自体すでにオリジナルで、



GKグループがデザインした最初のオートバイYAA1

そこから形も生まれ、いろいろ変化していくことで一つの文化を作っていくのだ。オートラリーでは各地を回った

が、アタレドではテレビ出演、リポーターがオートバイのセックスはどこかたすねるので、思いあぐねた末、排

ヤマハ発動機のオートバイはその後もいろいろデザインした。その中で特徴的なのが「モルフオII」(一九九一年)だ。ネーミングは昆虫などの「変態」だが、理念は「人機根源」だ。人間がオートバイに乗ると人と機械が一緒になるイメージで、乗る人の体の大きさに合わせてシートが動き、ハンドルの高さも調節される仕組みだ。

三年前には能の鼓の音と生命が共振するイメージで「プロタイプMT-01鼓動」(一九九九年)をデザインした。オートバイのデザインは、我々にとって、毎日食べている料理のようなものだ。料理のレシピも毎日替わるが、オートバイもパラエティに富んでくれば文化になる。YAA1は、日本にオートバイ文化を作るきっかけになったと自負している。

(インダストリアルデザイナー)